

二〇二六年度

問題冊子

国語	教 科
国語	科 目
13	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 試験終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
3. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

[1] 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

基本的に日常の実験とされる日々の試みは、大きく分けて二つの条件の影響を受ける。一つは様々な「社会的制約条件」、もう一つは実験を可能にする様な「社会技術的装置」という考え方である。この議論の出発点は、社会学者ベッカー達が一九六〇年代に行った様々な職場での現場学習の実態調査にある。このプロジェクトはもともと学校教育の有用性についての問題提起が目的で、それとの対比で様々な現場での学習状況を詳細に観察した。だが皮肉にも、この過程で学校教育のみならず、現場学習にもそれ固有の問題がある点が明らかになった。実際の仕事現場では、時間と業務に追われ、新人の学習に必要なゆとりや現場での教授が欠けていたのである。新人が教えを請いたくてもまわりはみな忙しくてそれどころではない。また他者の行動を観察する余裕もない。他方、現場では失敗が許されず、失敗は様々な形で損失に直結しかねないのである。

こうした現場観察に対して異議をとなえたのは、レイヴらによる伝統的徒弟制研究で、一時期「状況的学習論」の名で教育関係者の間で持て囃された。この議論では新人の修業の過程に、ある種の試行を可能にするような猶予空間があることが強調される。レイヴが調査したアフリカの仕立屋の就業プロセスでは、初期の段階でおこる技術の不足による仕立ての失敗、そしてその結果としての布の切れ端等は、リサイクルの対象として有効活用される。新人が現場に参加しても、ベッカーのいう現場の諸問題を緩和するための「組織的な緩衝材」がそこに組み込まれているのである。

この空間のことを彼らは「周辺」と呼び、そこに参入することを周辺参加と呼んだ。この周辺というのはかなり特殊な空間である。この空間は、新人がその未熟さ故に試行錯誤を繰り返す場合、それがもたらす様々なリスク(私の言い方では「毒素」)を中和する役割を果たす。この議論は、現場に於いてそうした空間を見出せず、結果として「現場でも学習は無理である」と言う過激な結論に達したベッカーへの反論でもある。

興味深いのは、こうした特別な猶予空間が常に存在するのか、また存在するとしたらどんな条件に於いてか、という点である。ベッカーや他の多くのケースが示す様に、現場に常にそうした猶予空間が存在している筈はない。私が調査した救命セン

諱言。今君有<sup>ニ</sup>失行、則跪直<sup>レ</sup>辞禁<sup>レ</sup>之。是君之福也。故臣来慶。請<sup>フ</sup>

賞<sup>シテ</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>明<sup>ニ</sup>君之好善、礼<sup>シテ</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>明<sup>ニ</sup>君之受<sup>レ</sup>諫<sup>カ</sup>」

〔晏子春秋〕

- 〔注〕
- 1 景公―春秋時代の斉国の君主。
  - 2 正昼―真昼。
  - 3 被髮―髪を結ばずに垂らす。
  - 4 六馬―六頭立ての馬車。諸侯は通常四頭立ての馬車を用いるとされた。
  - 5 御―同乗させる。
  - 6 正閨―宮中の小門。
  - 7 刎跪―ここでは宮中の門番を指す。
  - 8 撃―たたく。
  - 9 晏子―斉国の大夫。
  - 10 裔款―景公の側近。
  - 11 大夫―ここでは景公の臣下の大夫たちを指す。
  - 12 賜―恩恵。
  - 13 宗廟―先祖を祭るみたまや。
  - 14 戮―辱める。
  - 15 社稷―国家のこと。
  - 16 諱言―はばかって明言を避けること。
  - 17 驕行―おごり高ぶった行い。

- 問一 傍線部④・⑤の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。なお現代仮名遣いで構わない。
- 問二 傍線部①を書き下せ。
- 問三 傍線部②とあるが、晏子がどのように考えた理由を説明せよ。
- 問四 傍線部③を現代語訳せよ。その際、「賞之」・「礼之」の「之」の内容をはっきりさせること。なお文末の「と」は省略して構わない。

[4]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)

景公<sup>(注1)</sup>正昼<sup>(注2)</sup>被髮<sup>(注3)</sup>乘<sup>(注4)</sup>六馬<sup>(注5)</sup>一御<sup>(注6)</sup>婦人<sup>(注7)</sup>以<sup>(注8)</sup>出<sup>(注9)</sup>正閨<sup>(注10)</sup>。別<sup>(注11)</sup>跪<sup>(注12)</sup>擊<sup>(注13)</sup>其<sup>(注14)</sup>馬<sup>(注15)</sup>而<sup>(注16)</sup>反<sup>(注17)</sup>。之<sup>(注18)</sup>曰<sup>(注19)</sup>、「爾<sup>(注20)</sup>非<sup>(注21)</sup>吾<sup>(注22)</sup>君<sup>(注23)</sup>也<sup>(注24)</sup>。」公慙<sup>(注25)</sup>而不<sup>(注26)</sup>朝<sup>(注27)</sup>。晏子<sup>(注28)</sup>睹<sup>(注29)</sup>裔<sup>(注30)</sup>款<sup>(注31)</sup>而<sup>(注32)</sup>問<sup>(注33)</sup>曰<sup>(注34)</sup>、「君<sup>(注35)</sup>何<sup>(注36)</sup>故<sup>(注37)</sup>不<sup>(注38)</sup>朝<sup>(注39)</sup>。」对<sup>(注40)</sup>曰<sup>(注41)</sup>、「昔<sup>(注42)</sup>者<sup>(注43)</sup>君<sup>(注44)</sup>正<sup>(注45)</sup>昼<sup>(注46)</sup>被<sup>(注47)</sup>髮<sup>(注48)</sup>乘<sup>(注49)</sup>六<sup>(注50)</sup>馬<sup>(注51)</sup>一<sup>(注52)</sup>御<sup>(注53)</sup>婦<sup>(注54)</sup>人<sup>(注55)</sup>以<sup>(注56)</sup>出<sup>(注57)</sup>正<sup>(注58)</sup>閨<sup>(注59)</sup>。別<sup>(注60)</sup>跪<sup>(注61)</sup>擊<sup>(注62)</sup>其<sup>(注63)</sup>馬<sup>(注64)</sup>而<sup>(注65)</sup>反<sup>(注66)</sup>之<sup>(注67)</sup>曰<sup>(注68)</sup>、「爾<sup>(注69)</sup>非<sup>(注70)</sup>吾<sup>(注71)</sup>君<sup>(注72)</sup>也<sup>(注73)</sup>。」公慙<sup>(注74)</sup>而<sup>(注75)</sup>反<sup>(注76)</sup>不<sup>(注77)</sup>果<sup>(注78)</sup>出<sup>(注79)</sup>。是<sup>(注80)</sup>以<sup>(注81)</sup>不<sup>(注82)</sup>朝<sup>(注83)</sup>。」晏子<sup>(注84)</sup>入<sup>(注85)</sup>見<sup>(注86)</sup>。景公<sup>(注87)</sup>曰<sup>(注88)</sup>、「昔<sup>(注89)</sup>者<sup>(注90)</sup>寡<sup>(注91)</sup>人<sup>(注92)</sup>有<sup>(注93)</sup>罪<sup>(注94)</sup>。被<sup>(注95)</sup>髮<sup>(注96)</sup>乘<sup>(注97)</sup>六<sup>(注98)</sup>馬<sup>(注99)</sup>一<sup>(注100)</sup>以<sup>(注101)</sup>出<sup>(注102)</sup>正<sup>(注103)</sup>閨<sup>(注104)</sup>。別<sup>(注105)</sup>跪<sup>(注106)</sup>擊<sup>(注107)</sup>其<sup>(注108)</sup>馬<sup>(注109)</sup>而<sup>(注110)</sup>反<sup>(注111)</sup>之<sup>(注112)</sup>曰<sup>(注113)</sup>、「爾<sup>(注114)</sup>非<sup>(注115)</sup>吾<sup>(注116)</sup>君<sup>(注117)</sup>也<sup>(注118)</sup>。」寡<sup>(注119)</sup>人<sup>(注120)</sup>以<sup>(注121)</sup>天<sup>(注122)</sup>子<sup>(注123)</sup>・大<sup>(注124)</sup>夫<sup>(注125)</sup>之<sup>(注126)</sup>賜<sup>(注127)</sup>得<sup>(注128)</sup>下<sup>(注129)</sup>。率<sup>(注130)</sup>百<sup>(注131)</sup>姓<sup>(注132)</sup>以<sup>(注133)</sup>守<sup>(注134)</sup>宗<sup>(注135)</sup>廟<sup>(注136)</sup>。今<sup>(注137)</sup>見<sup>(注138)</sup>戮<sup>(注139)</sup>于<sup>(注140)</sup>別<sup>(注141)</sup>跪<sup>(注142)</sup>以<sup>(注143)</sup>辱<sup>(注144)</sup>社<sup>(注145)</sup>稷<sup>(注146)</sup>。吾<sup>(注147)</sup>猶<sup>(注148)</sup>可<sup>(注149)</sup>以<sup>(注150)</sup>齊<sup>(注151)</sup>于<sup>(注152)</sup>諸<sup>(注153)</sup>侯<sup>(注154)</sup>乎<sup>(注155)</sup>。」晏子<sup>(注156)</sup>对<sup>(注157)</sup>曰<sup>(注158)</sup>、「君<sup>(注159)</sup>勿<sup>(注160)</sup>惡<sup>(注161)</sup>焉<sup>(注162)</sup>。臣<sup>(注163)</sup>聞<sup>(注164)</sup>下<sup>(注165)</sup>無<sup>(注166)</sup>直<sup>(注167)</sup>辭<sup>(注168)</sup>上<sup>(注169)</sup>有<sup>(注170)</sup>隱<sup>(注171)</sup>惡<sup>(注172)</sup>民<sup>(注173)</sup>多<sup>(注174)</sup>諱<sup>(注175)</sup>言<sup>(注176)</sup>君<sup>(注177)</sup>有<sup>(注178)</sup>驕<sup>(注179)</sup>行<sup>(注180)</sup>。古<sup>(注181)</sup>者<sup>(注182)</sup>明<sup>(注183)</sup>君<sup>(注184)</sup>在<sup>(注185)</sup>上<sup>(注186)</sup>下<sup>(注187)</sup>多<sup>(注188)</sup>直<sup>(注189)</sup>辭<sup>(注190)</sup>君<sup>(注191)</sup>上<sup>(注192)</sup>好<sup>(注193)</sup>善<sup>(注194)</sup>民<sup>(注195)</sup>無<sup>(注196)</sup>二<sup>(注197)</sup>。」

ターでは、特に看護部門は目が回る程の忙しさで、そこで当時問題になっていたのは看護業界という「リアリティ・ショック」、つまり学校から現場、という急激な環境の変化に適応出来ずに調子を崩す若い看護師のメンタル上の問題であった。これはまさに現場に於いて、実験的試行を可能にする猶予空間が殆ど存在しない実例である。

学習の実験的領域論に於ける実験的行為は、多様な日常の現場に埋め込まれたミクロの存在であるが、その存在様式は、それを阻害する様々な制約との関わりで、時間的にも、空間的にも変化する。特に重要なのは、そうした実験的試行がもたらす負の要素、即ち失敗(毒素)である。新人は様々な形で実験的試行を行い、それは彼らの成長に深く関与する一方で、それによってもたらされる毒素の扱いは難しい。ラボの様に社会的、空間的にカクリすると言う方法は日常の実験では困難である。

これは経済的コストであり、対処法はリサイクルのシステムである。他方この毒素が人命にかかわる場合、話はこう簡単には行かない。外科手術がよい例であるが、新人の失敗は患者の生死に直結する。それ故こうした場合での対処法は、新人が段階を追ってより現実に近い実践に近づく様な訓練プロセスという形を取る。献体、動物、模型やシミュレータといった代替物を大いに活用し、実践状況でも危険度の少ない部分からじわじわと参加するのである。実際、外科医の世界では、「外科医の腕は過去に何人の患者を殺してきたかによる」といった物騒なジョウダンを現場で聞いたことがある。過去の失敗を通じての技術の向上という一般原則から言えば、ここには(あまりうれしくはないが)一分の真実がある。他方、医療事故に対する世間のまなざしが険しさを増し、ソシヨウ数も急増する現在では、事故状況を曖昧にするのは難しい。失敗に対する世間の圧力が強まっている現状では、失敗のコストを軽減しつつ、どう実験的試行を可能にするかは、喫緊の問題なのである。

学習の実験的領域論では、こうした失敗のコストを定義づける様々な社会的制約について分析している。その第一は時間である。実際の多くの現場で、新人が時間をかけて実験し、その失敗から学習するといった余裕は無い。そうした時間的制約が、現場での教授関係にも制限を与える。第二は経済的制約で、現場での失敗の多くは経済的な損害という形で現れる。また法・倫理的な制約は、たとえば医療事故の現状をみれば分かるであろう。

またこの枠組みでは、日常的な諸現場に於ける実験(日常的実験)と、ラボに於ける実験を対比しているが、ここでは、ラボは様々な制約要件に対して、特別に寛容な社会空間という位置づけがなされている。実際、実験室で費やされる<sup>おびた</sup>夥しい試行の繰り返しは膨大な失敗を生むが、それ自体が新たな発見への中心的な基盤である。それ故それらは「失敗」というよりも、前進のための必須の手続きである。

とはいえ、そこに上述した諸制約が全く存在しない訳ではない。いくら時間に寛容とは言え、何年も成果が挙がらない実験の継続は難しい。更にここには経済的制約も絡んでくる。ロケット打ち上げの様に、一部の分野での実験の巨大化により予算が膨れ上がり、実験期間も長期化する分野がある。このことがまさに新人の学習問題と直結するのである。

また、法・倫理的制約もその圧力を強めつつある。かつての様に、人体実験的な試みが殆ど野放しだった時代は終わり、動物実験に対してすら倫理的な批判のまなざしが向けられる時代である。また宇宙空間についても、調査実験により当該惑星の環境が不必要に改変されないような注意も必要となりつつある。これらの動向は、日常的な実験に比べ、その制約条件から比較的自由と考えられるラボ(あるいは研究一般)と言う環境でも、諸制約の力が強まっている現実を示している。

とはいえ、社会実験の様に、一般社会を直接巻き込んだ実験に比べると、ラボに於ける実験での制約要件は、相対的にマイルドである。学習の実験的領域論は、あくまで日常的現場での実験的試行のマイクロ分析であるが、社会実験のそれは、多くの場合、(社会)「実験」と名付けられた、公的な実験である場合が少なくない。当然ながら、<sup>③</sup>諸制約との関わり方は、学習の実験的領域論で示したそれとは、連続面と切断面の両方がある。

社会実験もまた、それなりの成果を生み出すためには、それに応じた予算、準備調整期間、実験の実施、そしてその結果の調査等の、様々な時間的、経済的コストがかかる。更に初期の交通実験に見られる様に、道路交通法の制約により、多くの試みが法的に難しかったという。こうした法的制約は、社会実験が一般化するにつれ、様々な形で緩和され実験がしやすくなったという点から言うと、社会の一部が「実験する社会」という概念を少しずつ受け入れるようになってきた証左と言えなくもない。

こうした法的緩和は、他の社会実験の領域でも報告され、それゆえ社会実験は様々な領域で促進されるようになってきた。と

〈注〉

- 1 それとはいはず—吉三郎への恋心を口に出さずに。
- 2 世の哀れとぞなりにける—お七の処刑が決まったことをいう。
- 3 恥をさらし—罪人としてさらされること。
- 4 手向花—死にゆく人へはなむけとして贈る花。
- 5 入相の鐘—日没に寺でつく鐘。
- 6 品かはりたる道芝の辺にして—「品川」という地名と「品変はりたる」をかける。品川の道のほとり(後出の「鈴の森」)で、通常と違った方法で処刑されたことを意味する。
- 7 煙—死んで煙になること。
- 8 廻向—読経や念仏をして死者の冥福を祈ること。

問一 傍線部④「種ともなりなん」、⑤「思ひ込みし事なれば」、⑥「心中さらにたがはず」を現代語訳せよ。

問二 傍線部①「悪事」とは何か、具体的に漢字二字で答えよ。

問三 傍線部②「人皆いづれの道にも煙はのがれず、ことに不便はこれにぞありける」とはどういうことか、説明せよ。

問四 世間の人々のお七に対する見方はどのようなものだったか、本文全体を踏まえて説明せよ。

問五(1)この話は実際に起こった事件をもとに創作されたもので、芸能作品の題材ともなつて普及した。江戸時代に発展した古典芸能の名称を一つ答えよ。

(2)井原西鶴は、同時代の町人社会を描いた小説を、『好色五人女』以外にも数多く残している。その中から一つ作品名を答えよ。

## 〔3〕

次の文章は、井原西鶴『好色五人女』「恋草からげし八百屋物語」の一節である。ある年の暮れに江戸で大火事が発生し、八百屋の娘お七も近くの寺に避難した。そこで吉三郎という若衆(男性の恋人を持つ少年)とひそかに恋仲になるが、親に引き裂かれ、自宅へ戻った後も愛を交わせないまま日々が過ぎていった。そこで思い悩んだお七はある行動に出る。この場面を読んで、後の問いに答えよ。

それとはいはずに、明暮女(注1)ごころのはかなや。あふべきたよりもなければ、ある日、風のはげしき夕暮に、いつぞや、寺へ逃げ行く世間の騒ぎを思ひ出して、「又(また)さもあらば、吉三郎殿にあひ見る事の種(か)ともなりなん」と、よしなき出来ごころにして、悪事を思ひ立つこそ因果なれ。少しの煙立ち騒ぎて、人々、不思議と心懸け見しに、お七が面影をあらはしける。これを尋ねしに、つつまずありし通りを語りけるに、世の哀れとぞなりにける。

けふは、神田のくづれ橋に恥をさらし、又は四谷、芝の浅草、日本橋に、人こそりて見るに、惜しまぬはなし。これを思ふに、仮にも人は悪しき事をせまじき物なり。天これを許し給はぬなり。

この女、思ひ込みし事なれば、身のやつるる事なくて、毎日ありし昔のごとく、黒髪を結はせて、うるはしき風情。惜しや十七の春の花も散り散りに、ほととぎすまでも惣鳴きに、卯月のはじめつかた、「最期ぞ」とすすめけるに、心中(注4)さらたがはず、「夢幻の中ぞ」と、一念に仏国を願ひける心ざし、さりとは痛はしく、手向花とて咲きおくれし桜を一本持たせけるに、うち詠めて、

世の哀れ春吹く風に名を残しおくれ桜のけふ散りし身は

と吟じけるを、聞く人ひとしほに痛まはしく、その姿を見送りけるに、限りある命のうち、入相の鐘つく頃、品かはりたる道芝の辺にして、その身はうき煙となりぬ。人皆いつれの道にも煙はのがれず、ことに不便はこれにぞありける。

それはきのふ、今朝みれば、塵も灰もなくて、鈴の森松風ばかり残りて、旅人も聞き伝へてただは通らず、廻向してその跡を弔ひける。さればその日の小袖、郡内縞のきれぎれまでも世の人拾ひもとめて、未々の物語の種とぞ思ひける。

はいえ、必ずしも全てが緩和された訳ではない。それゆえ特に建築系の社会実験では、まさに架設性という点から、法的手続きにテイシヨクしない形で即興的に実験を行うやり方が模索される一方で、より長期的展開をシザに入れれば、最初からその合法性を十全に担保しておく必要もある。

(福島真人『実験』とは何か 科学・社会・芸術から考える』による。なお、本文を変更した箇所がある。)

問一 傍線部⑦⑧の片仮名を漢字に直せ。

問二 傍線部①「新人が現場に参加しても、ベッカーのいう現場の諸問題を緩和するための「組織的な緩衝材」がそこに組み込まれているのである」とあるが、どういふことが具体的に説明せよ。

問三 傍線部②「失敗に対する世間の圧力が強まっている現状では、失敗のコストを軽減化しつつ、どう実験的試行を可能にするかは、喫緊の問題なのである」とあるが、どういふことが具体的に説明せよ。

問四 傍線部③「諸制約との関わり方は、学習の実験的領域論で示したそれとは、連続面と切断面の両方がある」とあるが、どういふことが説明せよ。

次は、昭和十九年に発表された、堀辰雄「樹下」である。これを読んで後の問いに答えよ。

その藁屋根の古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小径のかたわらに、一体の小さな苔蒸した石仏が、笹むらのなかに何かしおらしい姿で、ちらちらと木洩れ日に光って見えている。いづれ観音像かなにかだろうし、しおらしいなどはもつてのほかだが、——いかにもお粗末なもので、石仏といっても、ここいらにはさらにある脆い焼石、——顔も鼻のあたりが欠け、天衣などもすっかり磨滅し、そのうえ昔がほとんど半身を被つてしまっているのだ。右手を頬にあてて、頭を傾げているその姿がちょっとおもしろい。①一種の思惟像とでもいうべき様式なのだろうが、そんなむずかしいことばでその姿を言いあらわすのはすこしおかししい。もうすこし、なんといいたらいいか、無心な姿勢だ。それを拝しながら過ぎる村人たちだつて、彼らの日常生活のなかでどうかしたぐあいであつた姿勢をしていることもあるかもしれないような、親しい、なにげなきなのだ。……そんな笹むらのなかのなんでもない石仏だが、その村でひと夏を過ごしているうちに、いつかその石仏のあるあたりが、それまで一度もそういったものに心を寄せたことのない私にも、その村での散歩の愉しみのひとつになった。ときどきそこいらの路傍から探つてきたような可憐な草花が二つ三つその前に供えられてあることがある。村の子供らのいたずららしい。が、そんなのではない、もうすこしちゃんとした花が供えられ、お線香なども上がつていたことも、その夏のあいだに二、三度あつた。

\*

「お寺の裏の笹むらのなかに、こう、ちょっとおもしろいかつこうをした石仏があるでしょう？ あれはなんででしょうか？」夏末になつて、私はその寺のまだ四十がらみの、しかしもう鋭く瘦せた住職からいろいろ村の話の話を聴いたあとで、そう質問をした。

「さあ、わたしもあの石仏のことは何もきいておりませんが、どういふ由緒②のものですか。かたちから見ますと、まあ如意輪観音にちかいかと思ひますが。……なにしろ、ここいらではちよつと類のないもので、おそらく石工がどこかで見覚えてきて、それを無邪気に真似③でもしたのではないでしょうか？……」

問一 傍線部㉗㉘の漢字の読みを平仮名で書け。

問二 傍線部①とあるが、「私」はなぜこのように思ったのか、詳しく説明せよ。

問三 傍線部②とあるが、なぜ「俗信」とみなされているのか、説明せよ。

問四 傍線部③とあるが、この観音像について調べたり考えたりしたことが、「信濃」でみた石仏についての「私」の見方をどのように変えたといえるのか、説明せよ。

問五 傍線部④は、前半のある部分に対応しているが、なぜ作品の末尾にこのようなことが書かれなければならないのか、詳しく説明せよ。

「そういうこともあるんですか？ それはいい。……」私にはその説がすっかり気に入った。たしかに、その像をつくったものは、その形相の意味をよく知っていてそう造ったのではない。ただその形相そのものに対する素朴な愛好からそういうものを生んだのだ。そうしてそのゆえに、——そこにまだわずかにせよ残っているかもしれない原初の崇高な形相にまで、私のようなものの心をあくがれしめるのであろうか？ こんないかにもなにげない像ですら。……

「ときどきお花やお線香などが上がっているようですが、村の人たちはあの像にも何か特別な信仰をもっているのですか？」最後に私はそんなこともきいてみた。

「さあ、それもいつごろからのことだか知りませんが、わりに近ごろになってからだそうですが、齒を病む子をつれて、村の年よりもがよく拌みに来ます」そういつてその住職は笑った。

②「あの指先で頬を支えている思惟の相が、村びとにはなんのことやらわからなくて、いつかそんな俗信を生むようになったと見えますな」

「それはいくらなんでも……」そう言いかけたが、しかしそのまま私は口をつぐんで、これから秋になって、夜ごとに虫がすだいて啼きはじめるあの笹むらのなかで、相変らず、じいっと小さな頭を傾げているだろうその無心そうな像を、ふいと目のうち蘇らせた。いつのまにこの像がこんなに自分にとって親しみのあるものになってしまったのだろうと訝りながら。……

\*

それから数年たって、私もときどき大和のほうへ出かけては、古い寺や名だかい仏像などを見て歩いたりするようになったが、そんな旅ながら、路傍などによく見かける名もない小さな石仏のようなものにも目を止めるようにしていた。そういうものの中には私の心を惹くようなものもかなりあるにはあったが、数年前信濃の山のべの村で見つけたあんなような味わいのあるものは一つも見出せなかった。そして、私はときどきあの笹むらのなかで小さな頭を傾げていた観音像を好んで思いだしていた。もとより旅にあつてはほどよく感傷的になるのも好いとおもっている私のことから、それが単なる自己の感傷にすぎなくて、それもそれで好いとおもっていた。

言ってみれば、それはそれまで何年かその山ちかい村で孤独に暮らしていた自分をもその一部とした信濃そのものに対する一種のなつかしさでもあろうし、また、こうやって大和の古びた村々をひとりできまよい歩いているいまの自分の旅すがたは旅すがたで、そんな数年前の何か思いつめていたような自分がそういったはかないものにまで心を寄せながら、いつかそれを通してひそかにあくがれていたものでもあったのであろう。ともかくも、その笹むらのなかの小さな思惟像は、何かにつけて、旅びとの私にはおもしろい出されがちだった。

\*

ある秋の日にひとりで心ゆくまで拝してきた中宮寺の観音像。——その観音像の優しく力づよい美しさについては、いまさら私なんぞの何もうことではない。ただ、この観音像がわれわれをかくも惹きつけ、かくも感嘆せしめずにはおかない所以の<sup>ゆえん</sup>一つは、その半跏思惟の形相そのものであろうと説かれた浜田博士の潤達な一文は私の心をいまだに充たしている。その後も、二、三の学者のこの像の半跏思惟の形の発生を考察した論文などを讀んだりして、それがはるかにガンダラの樹下思惟像あたりから発生して来ているという説などもあることを知り、私はいよいよ心に充ちるものを感じた。

あのいかにも古拙なガンダラの樹下思惟像——仏伝のなかの、太子が樹下で思惟三昧の境にはいられると、その樹がおのずから枝を曲げて、その太子のうえに蔭をつくったという奇蹟を示す像——そういう異様に葉の大きな一本の樹を裝飾的にあしらった、浅浮彫りの、数箇の太子思惟像の写真などをこのごろ手にとって眺めたりしているときなど、私はまた心の一隅である信濃の山ちかい村の寺の小さな石仏をおもしろい浮かべがちだった。

\*

一つの思惟像として、瞑想の頬杖をしている手つきが、いかにもぶざまなので、村人たちには怪しい迷信をさえ生じさせていたが、——そのうえ、鼻は欠け落ち、それに胸のあたりまで一めんむに苔が生えていて、……そういえば、そんなにそれが苔づくほど、その石仏のあるあたりは、どんな夏の日さかりにもいつも何かひえびえとしていて、そこいらまで来ると、ふいと好い気

もちになってひとりでに足も止まり、ついそのままその笹むらのなかの石仏の上へしばらく目を憩わせる。と、苔の肌はしつとりとしている。ちょっとそれを撫でてみたくなるようなみごとさで。——そう、いまのいままでそれに気がつかなかったのは、いや、気がついていてもそれをなんとも思わずにいたのはずいぶん迂濶だが、あそこは何かの大きな樹の下だったにちがいない。——すこしはなれてみなければ、それがなんの樹だかわからないほどの大きな樹だったのだ。あの頬杖をしている小さな石仏のうえにちらちらしていた木洩れ日も、よほど高いところから好いぐあいに落ちてきていたので、あんなに私を夢みごちにさせたのだっただろう。

あれはいつたい、なんの樹だったのだろうか？……そんなことをおもいながら、私はふと樹下思惟ということばを、そのことばのもつ言いしれずなつかしい心像を、身にひしひしと感じた。あれはいつたい、なんの樹？……だが、あの大きな樹の下で、ひとり静かに思惟にふけていたもの——それはあの笹むらのなかに小さな頭を傾けていた石仏だったろうか？ それとも、それに見入りながらその怪しげな思惟像をとおしてはるかかなたのものに心を惹かれていた私のほうではなかつたろうか？

それにしても、あそこには、——あの何やらメルヘンめいた石仏の前には、<sup>④</sup>いまだにあの愚かな村びとどもの香花が絶えな

いだろうか？ 子供たちがそこいらの路傍から摘んでくるかわいらしい草花だけならいいが。……

〈注〉

- 1 半跏思惟——仏像彫刻の形式の一つ。片足を他方の片足の膝頭にのせてすわり、片手を頬について思考する様子を表現する。
- 2 浜田博士——浜田耕作。考古学者。
- 3 ガンダラ——古代インド北西部にあった地名。
- 4 太子——釈迦。
- 5 メエルヘン——童話。